
狂気乱舞～小話集～

ekaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂気乱舞〜小話集〜

【Nコード】

N9786A

【作者名】

ekaki

【あらすじ】

狂気はすぐ側にある。貴方の側にも。私の側にも。

狂気乱舞1（前書き）

ショートショート集です。昔に書いた物も、たまに載せるかもしれません。

恥ずかしながら、時々更新させて頂きます。

因みに、時々非常にグロテスクな話を載せるかもしれませんが、そういうのが駄目な方は注意して下さい。

狂気乱舞 1

1：死とは

あるバーのカウンターで、二人の男が話している。

「なあ、死ぬってどういう事だと思う？」

右に座っている、コートに身をつつんだ男が、左に座るスーツの男に聞いた。

スーツの男は表情も変えず、振り向きもしないで答えた。

「分かるはずないだろ。」

「そりゃそうだ。」

コートの男は笑いながらカクテルを飲み干した。

「だが」

コートの男がバーテンダーに追加を頼もうとした時、スーツの男がいきなり話を切り出した。

「ん？」

「死の事は分からないが、死がどんな物なのかを知る術は知っているぞ。」

言いながらも、スーツの男は、やはり振り向いたりはしない。

コートの男は興味半分に聞いた。

「教えてくれよ。」

「こうするのさ。」

コートの男が聞いた瞬間に、スーツの男はポケットから金槌を取り出してコートの男の頭を叩き割った。

コートの男がゆっくりと倒れていく。

「実感できたか？」

動かなくなったコートの男に聞くと、スーツの男はカクテルを飲み干して夜の町に消えた。

2：テスト前日

もうテストまで時間がない。

勉強できる残り時間は約7時間。

もう間に合わない。

今回のテストは確実に前回より悪いだろう。

また父親に叱られる。友達に置いていかれる。優秀な兄と比較されて馬鹿にされる。

ちくしょう。

別に勉強なんかできなくてもいいじゃないか。

ちくしょう。

俺が何をしたって言うんだ。ちくしょう。大体テストなんてもんがあるからいけないんだ。ちくしょう。いや、そもそも学校があるから。いやいや、勉強なんてもんがあるから。ちくしょうちくしょうちくしょうちくしょうちくしょうちくしょうちくしょうちくしょう全部消し去ってやる全部全部全部・・・。

目が覚めたら朝だった。

少年は絶望した。

3：新聞

電話が鳴った。

どうせ何かの勧誘か何かだろうと思い、俺は電話を取った。

母が取ろうとしたが、気の弱い母では、断るのにも時間がかかってしまう。

俺も気は弱い、勧誘の電話は、子どもが出ると大体は諦めるので、それが一番無難でいい。

「もしもし」

「あ、木村さんのお宅ですか？」

「はい、そうですが。どちらさまでですか？」

「あ、申し訳ありません。こちらは。新聞です。今回は少しお話が・・・」

「あの、俺よく分からないんですが」

「あ、これはまた失礼しました。じゃあ、ご主人様が奥様はいらっしゃいますか？」

「あ、父は仕事で、母は・・・少し用事があって出かけているんです」

「嘘つくんじゃないよ。」

お前の後ろに奥さんいるじゃないか」

4：睡眠

「お母さん、喉が痛いよう。眠れないよう。」

「あら、風邪かしら。じゃあお薬飲んで寝ましようね」

「うん。」

母親は微笑むと、喉の痛みを抑えるシロップの薬と、自分が毎日服用している睡眠薬を飲ませた。

生憎市販の風邪薬がきれていたので、風邪薬は明日病院で貰う事にした。

母親は知らなかった。

睡眠薬が自分の夫の手によって毒物にすりかえられていた事に。

親子二人は二度と目覚める事の無い眠りに堕ちた。

5：ねえ

「お父さん。」

「ん？なんだい？」

「お父さんは、僕に会えて嬉しい？」

「瞬キョトンとした顔になったが、父親は微笑むと言った。
全然。」

狂気乱舞1（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。
図々しいですが、感想を頂けたら幸いです。

狂気乱舞2

6：落とし物

「あの。」

女は男を呼び止めた。

「はい？」

「これ落ちてましたよ。」

「あ、ありがとうございます！」

男は自分の左腕を受けとると、早足で去っていった。

7：散髪

「あゝあ、スッキリした！」

「お、井上じゃんか」

「お、橋本。」

「何してるんだ？」

「見ての通りだろ。」

「ああ、随分イメージ変わったなあ。」

「な、さっぱりして、益々いい男なっただろ？」

「いい男かどうかは知らんが、本当にばっさり切っちまったなあ。脳味噌丸見えだぜ。」

8：交通事故

「おい！あつちで人が曳かれたみたいだぞ！」

「何、本当か！」

「ああ、本当だ！かなりの人が集まっている！早く行かなきゃ、俺ら

の分の肉がなくなっちまうぞ！」

「マジかよ！今月は只でさえ事故が少なくて肉食ってないのに！」

9：クローゼット

「あんたの部屋、本当にいつ見ても汚いわねえ。少しは掃除したらどうなの！？」

「母さんはいつもうるさいんだよ。関係ないだろ。出ていってくれよ。」

「うるさく言われたく無いなら、少しは掃除しなさい！折角こんな立派な部屋があるのに、こんな使い方していたらもったいないじゃない。大きなクローゼットもあるんだから、服とかもね・・・」

母親はクローゼットのドアに手をかけた。

「あ！ちよつと！勝手に開かないでよ！プライベートの物とかも入ってるんだから！」

息子は母親をクローゼットから遠ざける。

「いいじゃない、親子なんだから。」

「関係ない。ああもう、いいから出てけよ！」

「そう言われると見てみたくなるのよね。スキあり！」

母親は無理矢理クローゼットのドアを開けた。

「あ！ちよつ・・・。」

母親は中を見て愕然とした。

出張に出ているはずの夫が、死体となって詰まっていた。

「あゝあ、見られちゃった・・・。」

「あんた・・・」

母親は息子を睨みつけて言った。

「これで何人目？・・・全く、腐る前に捨てときなさいよ。」

「ねえ、翔、背中が痛いんだけど、マッサージしてくれない？」

「ああ、いいよ。どこら辺？」

「下の方の・・・ああ、そこそこ。」

「気持ちいい？」

「気持ちいいけど、もう少し力を入れて。」

ゴキゴキツバキツグチュツ

「こんな感じ？」

狂気乱舞2（後書き）

まだまだ続くと思いますので、読んで頂けたら幸いです。
よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9786a/>

狂気乱舞～小話集～

2011年1月29日16時36分発行